

大江健三郎の最初期小説における「政治的な参加」の問題 — 「喝采」を中心に—

デヴリム・C・ギュヴェン

要旨

Oe Kenzaburo's "Applause" ("Kassai", 1958) recounts the story of Natsuo, a university student who is the "male mistress" of Lucien, a foreign diplomat posted in Japan. Natsuo's encounter and "successful" sexual intercourse with Yasuko, who is hired as a maid-prostitute by Lucien gives him hopes about an authentic "commitment" with her. Yet his plan collapses when he learns that she is in fact a prostitute specializing exclusively in homosexual couples, and all was a game planned by Lucien in order for Natsuo to become economically and sexually further dependent upon him. Oe used "sexuality" as a metaphor for articulating politics and power relations; the current political disengagement of Natsuo and the stagnation of the student movement during the suffocating social atmosphere of the late 1950s are translated into a creative discourse of sexuality by adopting images of impotence, sexual dependence and prostitution. Through juxtaposing almost all socio-political and sexual senses of the word "engagement" and a deliberate mistranslation of the French word "engager", Oe attempts to expose the effects of power mechanism of the Eurocentric culture, i.e., "cultural imperialism" on the periphery countries.

キーワード: ^{アンガジュマン}政治的な参加と^{デザンガジュマン}政治的離脱, 「第三世界」論, ^{オーセンティシティー}文化帝国主義, 正真正銘性, 「性」と「政治」

1. はじめに

「^{アンガジュマン}政治的な参加」は、大江健三郎の「喝采」（1958年9月）や「見るまえに跳べ」（1958年6月）をはじめとする最初期の作品において重要な構成要素であっただけでなく、それ以降の半世紀以上にわたる作家生活においても主要なモチーフでありつづけた。なお、この二作において「政治的な参加」は、50年代後半に多発し「脱植民地化」と歴史的に命名された「第三世界」の反植民地主義的な解放運動のモチーフと絡まり、「性」のイメージをとおして捉えられ、表現されている。「政治的な参加」、「第三世界の解放」、

「性」という三つのモチーフの連動に基づく創作法は、『われらの時代』（1959年）でさらに洗練された形で再活用された。

大江は、あらゆるレベルの中心指向的権力に「批判的な距離」を保ち、それらに抗う「アマチュアな知識人」（エドワード・サイード）¹⁾としてのモラル意識をつねに抱えつづけた作家である。そしてまた「政治的な参加」そのものが大江の作家としてのモラル意識の形成に多大に貢献してきたと言える。このことは、例えば、1960年代の「原水爆禁止運動」（『ヒロシマノート』（1965年）はその結実である）や『沖縄ノート』（1970）で総括された「沖縄返還運動」などとの関わり方に示されている。それは、日本の主要な知識人によって結成された反戦団体である「九条の会」や『『沖縄ノート』裁判』²⁾における最近の大江の「政治的な参加」においても持続している。このようなアンガジュマンのほとんどが「第三世界」問題（沖縄、アフガニスタン、イラクなど³⁾）と深くかかわっているのは紛れもないことだが、こういったモラル意識の形成の始まりを「喝采」のような最初期の小説の物語内容のレベルにおいて見て取ることができる⁴⁾。

そこで、大江文学の独自性の淵源の一つをなす「政治的な参加」の問題を徹底的に把握する上で、「喝采」という、先行する大江研究では（同じ主題を題材にする「見るまえに跳べ」や『われらの時代』とは相違して）ほとんど見落とされてきた作品⁵⁾を読み直すことが必要不可欠な作業となる。

2. 政治的離脱と「オーセンティシティー正真正銘性」の探求

「喝采」は、F 大使館の外交官であるリュシアンメイル・ミストレスの同性愛の「情夫」であり、彼と同棲するフランス文学科の大学生夏男の屈辱的な生活やそこから抜け出る試みを物語る。主人公は、「正真正銘」の自己同一性のモデルを求め、そのモデルを模倣し、それと同一化することによって自身が喪失した「本物の」何かを回復しようとする青年として設定されている。本稿では、夏男におけるそのような「正真正銘なるもの」への渴望が、彼の政治的離脱の問題といかに深く関わっているかを呈示する。

2. 1 アイデンティティー職業的自己同一性の「あいまいさ」という設定

「喝采」の物語全体にわたって一貫して漂っている雰囲気は、「正真正銘性」を奪われた、頹廃状態に陥った、あえて言えば「荒地」としての50年代後半の日本社会のそれである。無論この作品には、文学的な現実主義というより、悲劇と喜劇を絡み合わせたスタイルによって現状を、意識的歪曲、一部のモチーフの余剰といってよいほどの反復、そして一連の誇張したイマージュをとおして表象するという意味でのグロテスクなパロディとしての戦略を見て取ることができる。「非・正真正銘」の社会的な雰囲気をかもし

出す上で導入される一つのグロテスクな仕掛けは、物語に出てくる作中人物の大半が異性愛のみならず、同性愛の売春・娯楽業で生計を立てる娼婦・男娼・「ヒモ」・(ゲイ・クラブの)「マスター」そして、その売春・娯楽業の顧客としての滞日の外国人となっていることにある。なおかつ、「外人バイヤー」と売春業界に属しない残りの作中人物も、(外国の大使館の)秘書や運転手、給仕、店員、(外国人夫婦の住っている家の)女中など、主に滞日西洋人に奉仕する低い社会階級の人々ばかりであり、このことは物語のセッティングとなっている「日本」に「新植民地」的な空気をもたらすのである。

しかし、それよりもっと効率的に「真正銘性」を奪われた、頹廃状態の社会環境の物語内的な雰囲気生成に貢献する仕掛けは、作中人物の営んでいる「職業」やそれとの相関関係における作中人物の職業的な自己同一性のあいまいさという設定なのだ。「喝采」の作中人物たちは、一つの特定の職業に就いてはおらず、その職業の「本物さ」を相対化し、その職業のそれなりの「真正銘性」をあいまいにするような副業、あるいは一連の副業を併せ持っていることが、なし崩し的に明らかになってくる。主人公や作中人物の営んでいる「仕事」ないしは「アルバイト」のグロテスクな「奇妙さ」・^{イデオロジック}特異性というテーマは、デビュー作「奇妙な仕事」(1957年)やそれに次ぐ「死者の奢り」(1957年)を始めとした最初期の大江文学の独創性の一部をなしていることは周知のとおりである。「喝采」においては、例えば夏休みの間に家事の世話をするために雇われた康子は、単なる女中ではなく、「三箇月ほどずつ日本に滞在して《家庭的な》生活をこころみながら外人のバイヤー」(13)⁹を相手にする娼婦である。それだけでなく、物語の終局の段階にいたって、彼女が実際のところ、「男同士」の「愛人たちと三人ひとぐみでくらす種類」で、「男たちの愛を傍からたすけたり、疲れた片方のかわりにたのしませたり」し(23)、「不能と寝たってちゃんときまりをつける」(24)特異な技能を併せ持った娼婦であることが判明する。

さらに、「本郷」の大学生の学生服を購入し、身につけることにより「擬似」の「学生」になろうとする「商売女の相談相手」、「ヒモ」を職業に持つ「男」と呼ばれる作中人物、ないしは、外国人相手の同性愛の「男娼情夫」兼「学生」である主人公の夏男も、自らの社会的な^{ステータス}位置の「真正銘性」が周りの「仲間」のみならず、自分自身によってすら認められない、それが奪われた人物として布置されている。

2.2 「本物の」フランス文化との接触——「性」と「政治」の交錯

50年代後半の日本の文脈では、「大学生」といった自己同一性・社会的位置に「真正銘性」を与えるのは、その「政治」との関わり合いであったことに疑問の余地はないだろう。とりわけ、砂川闘争=反米基地拡張闘争(1955~57年)を主導したのは、共産党、社会党ないしは、労働組合などよりむしろ全学連であったことを想起すると、「学生」が当時担った社会政治的な役割が想像に難くないだろう。すなわち、当時「学生」とは、単に大学で学業を修める人物ではなく、自国や、世界の政治運営に、それに質的な変化

を与える上で参加する権限を積極的に要求する社会階級を意味していた。そこで、「ヒモ」を職業に持つ「男」が、「学生」になることに深い憧憬を抱くことには、そのような「真正銘性」のイメージが放つ魅力の作用を受け止めるべきである。しかし、夏男の「学生」としての「職業的」な自己同一性の「本物さ」は、「学生」の「仲間」には認められない。そのことをめぐる主人公の考察が小説で次のように綴られている。

かれは教室のいちばんうしろの席に寝そべっていて、同じクラスの学生たちがかれについて話すのを聞いたのだ。あいつは、フランス人にやしなわれて一緒に寝てるんだ。どういうふうにするか知ってるか？とにかくあいつが痔を悪くして、その小父さまに治療費まで出させていることは確かなんだ。まあ、厭ね、わざわざ同情に満ちた声を出した女子学生がいうのだ。あの方は、本物のフランス語をおそわるために同じ部屋でくらしてるのよ。本物のフランスと接触するためといってもいいわ。本物のフランスとお尻で接触するの？そして感情を昂ぶらせた笑い。かれは体をおこし猛然とその学生たちにたちむかって行ったか。かれは屈辱にまみれて唇をかみしめ、躰をかたくしてじっと寝そべったまま、それらの学生たちが教室を出て行くのを待っていたのだ。(12)

上に引用した部分は、夏男がリュシアン「情夫」であることを女子学生と学生たちが読者に露呈する場面である。女子学生によるこの批判は、「政治」と「性」を絡み合わせていることに注目すべきである。50年代後半における「学生」というカテゴリーは濃厚な政治的色彩を持っていたが、ここでは女子学生が「性」を夏男の政治的な立場を批判するための手段にしている。すなわち、女子学生の批判的に曝されているのは、夏男の「同性愛」そのものではなく、彼のリュシアンとの「接触」による「政治的な離脱」なのである。「性」は、背景にあり、「本物の」フランス語・フランス文化に魅惑され、中心指向的な文化帝国主義という一種の権力装置によって捏造された「幻想」の「真正銘性」に魅惑され、それに対する「批判的な距離」を完全に失った周辺の国の「学生」に向けられた辛辣な風刺に用いられている。

「見るまえに跳べ」以降の作品において大江がそれまで扱った「監禁状態」、「閉ざされた壁のなかにいる状態」というテーマを放棄し、政治的な力関係をヴィヴィッド且つ衝撃的に表現する意図を実行させる上で、「性」のイメージを「方法」にし、このような「性の方法化」が『われらの時代』で小説全体を貫いているテーマとして活用されたことは周知のとおりである。「喝采」のこの部分でそのような「小説の方法」が物語内部的に露呈されているのである。

3. 物語の記憶の原点としての1955年

つまり、ここで問題化されているのは、夏男の「政治的離脱」なのである。そして、夏男の「政治的離脱」も、物語内容のレベルでは「性的」なイマージュをとおしてアレゴリー的に表現されていることは、彼の康子との異性愛的な性交渉直後の場面で判明する。下記の引用はリュシアンが夜勤のため留守だった夜、康子が夏男に性交渉を促し、そして夏男が不能に陥らず異性との性交渉に成功したことに解放感を抱く場面である。

毎夜リュシアンの躰にくみしかれて、快樂のために女のようにすすり泣いていたおれが、いま男としてこいつを愛したのだ。おれは立派にそれをやったのだ。ほんとうに勇気を出すだけでよかったのだ。夏男は嗚咽におさわれ肩をなみうたせてそれにのめりこんでいった。かれは自分が三年もまえからの痼疾から回復したところであることを感じていた。そしてそれに付随する数知れないコンプレクスからまったくときはなたれているのを感じていた。かれは康子の、おだやかなほほえみをうかべた眼に、むせびなきながらくちづけた。康子はかれの頭をゆっくりした腕の動作でなでてくれていた。(18)

物語のこの段階で、夏男の異性愛的な不能やリュシアンへの同性愛的な執着＝従属を捉える「三年まえからの痼疾」という表現は、この小説に胚胎された歴史認識を発揮する上で重要な指標ともなる。「喝采」が掲載された1958年を基準にすると「三年まえ」という表現が指し示しているのは、1955年であることは想像に難くない。1955年は、社会党の統一や自由民主党の結成（＝保守合同）による「五五年体制」の出現、高度経済成長期の開始などのような、様々なレベルで日本の「学生」にとって決定的な重要性を持つ一連の事件が生起した年であった。

ところが、そのなかで「学生」にとってもっとも衝撃的であったのは、「民族解放民主革命」路線、つまり、武装闘争方針の放棄が決定された共産党の「六全協」（「第六回全国協議会」）であった。このことは、当時まで「学生党员」として反レッド・パージ闘争、朝鮮戦争反対運動や全面講和運動など日本戦後の歴史において重大な大衆的な闘争に「政治的な参加」をした全学連の共産党からの「離脱」といった結末をもたらした。無論、このような「方向転換」は、「新植民地主義」を指導する合衆国、第二次世界戦後、世界各国の左派知識階級によって合衆国（オールド・ネイティブ）に取って代わるものとして神話化されたのにもかかわらず、そうした「真正銘性」を喪失しつつあるソ連、両大国の中心指向的な権力に対する非同盟主義を唱えたバンドン会議（1955年4月）が体現した「第三世界の精神」とはかなり対照的なものであった。

全学連は1955年の「六全協」以後の過程において共産党から離脱し、なおかつ、砂川闘争の過程で、社会党や総評にも背を向けられることになった。無論このような孤立化

は、全学連の指導部における権威主義、英雄主義やアジテーションの傾向に拍車をかけ、一般の学生と指導部の間における種々の問題をもたらした⁷⁾。砂川闘争＝反米基地拡張闘争における警察官の暴力行使に衝撃を受け、かつまた、学生組織の指導部の無責任な態度に違和感を抱いて政治に参加できなくなった大学生のストーリーである「見るまえに跳べ」においてすでに「政治的離脱」のモチーフは布置されていた。「見るまえに跳べ」⁸⁾と、その延長線上にある「喝采」の、双方の作品の物語世界における記憶の原点は、1955年なのである。

そのうえ、「六全協」が開催されたのは1955年の7月という真夏であったことからすると、物語言説のレヴェルにおける、「夏男」という主人公の名前の選択が意識的な戦略によるものであったことは判然としてくる。この「タイプ名」の命名のみにおいてすら「政治」(夏)と「性」(男)の意味作用が意図されているのだ。当年の夏以降「男らしいさ」を奪われた夏男が、冒頭に出てきて、物語では「男」と呼ばれる「ヒモ」の「男らしい好もしさ」(9)に魅了される反面、「男」が「夏男」の「学生」としての立場に憧憬を持つことにもこのような意味作用を見て取ることができる。

なおかつ、先に引用した部分における、喪失した「正真正銘性」を文化帝国主義の「本物さ」に求める夏男のありさまを、「性」的な言説をとおして、しかも「政治的」な女子学生に風刺させるという設定には、全学連に見られた男性中心主義的な言説のパロディ化という仕掛けがあることを見逃すわけにはいかない。フランスのアルジェリアの入植者階級出身の小説家・哲学者のカミュのキーコンセプトとしての「男の美学」を基軸にした「英雄主義」は、西ヨーロッパの新左翼やその日本における対応物として理想化された全学連および共産主義者同盟＝ブントなどにも見られ、後に、フェミニズムから激しい批判を浴びることになった問題点であったことは大嶽秀夫が指摘するとおりである⁹⁾。こうした「男の美学」の言説のパロディ化は、夏男の不能を「一時的」に治癒した康子の「偽善」に満ちた言葉遣いにおいて展開させられることになる。

「できるわよ、ぼうやにだって」と康子は声をひそめてつぶやきかけてきた。「ほんとうに、ぼうやも立派にできるじゃないの。あんたは男よ」

「おれは男だ」と夏男はむしろ自分自身のなかにかすかにのこっている臆病なためらいの芽をひねりつぶすためにくりかえした。「男らしいことのできる人間だ」

「わかって良かったわね、おめでとうということにするわ」と康子がいった。

「拍手喝采」と夏男は康子の汗ばんで熱い胸に片頬をうずめて幸福にいった。(18～19)

「喝采」は、西欧の新左翼のみならず、全学連をはじめとする日本の学生運動における「男性中心主義」的な傾向に、後にフェミニズムが向けることになった批判を先取りしていると言えよう。

4. 「喝采」の「第三世界」論——「海の向こう」に求められる「正真正銘性」

物語の記憶の原点が「六全協ショック」が経験された1955年である以上、政治運営に参加することによる「正真正銘性」を喪失したのは、つまり、「三年もまえからの痼疾」に煩わせられるのは夏男だけではない。夏男の仲間も、その喪失の償いを捜し求めているのである。その意味で、なによりも興味深い点は「正真正銘」のモデルへの渴望は、夏男において「第一世界」＝フランスへの憧憬、そして、仲間の学生たちには「第三世界」＝アルジェリア解放戦争へのアンガジュマンの形で発生することにある。リュシアンが、康子との最初の夕食の際、アルジェリア問題に抗議するために大使館に来た「政治的な参加」をした日本人学生の話をする場面で二つの異なる政治的な姿勢は顕在化するのである。

「植民地をなぜフランスが放棄しないか聞きにきたんだ」とリュシアンは笑いにいきをはずませながらいった。「それで、おれがどう答えたと思う？」

「答えたの？親切に」

「植民地がなければフランスはやっていけない、日本だって四国をもっているじゃないかとおれはいったんだ」とますます笑いながらリュシアンはいった。「四国をね」

夏男はリュシアンを前にして憤激している学生たちの顔を思いうかべリュシアンにあわせて笑った。かれのクラスにも怒りっぽい若者たちがうようよいて、かれらは英国やフランス、アメリカにいたるまで、あらゆる国々の大使館へ声明文を持ちこむのだ。大使館の植こみへ投石してつかまった男さえる。

「フランスの政治があいつらに、あの黄色の小男どもに何の関係を持つんだ」とリュシアンはいった。「現にフランス人のおれだって関係もなにもないんだ」

「みんな政治に熱中しているんだ」と夏男はいった。「とくにフランスの政治となると眼の色をかえるんだ」

「汚らしい学生ども、日本人の学生ども、自分の尻をなめるがいい」と歌うようにリュシアンはいった。「海の向こうを気にかける身分か」(12)

日本の学生運動家が共産党からの離脱の結果喪失した政治的な「正真正銘性」の代替物を「海の向こう」に求めるようになったことは、リュシアンの人種差別的な口調で風刺されている。「英国やフランス、アメリカにいたるまで、あらゆる国々の大使館へ声明文を持ちこみ」、「大使館の植こみへ投石」するという「怒りっぽい若者たち」の行動様式は幼稚なルサンチマンにしか見えない。たとえば、「怒りっぽい若者たち」という言葉遣いは、「怒れる若者たち」(Angry Young Men)というイギリスの新左翼の形成において大事な役割を果たした一群の作家への言及である。日本の「学生」の「海の向こう」＝

「第三世界」への関心は、無媒介のものではなく、「第三世界論」を掲げ、スエズ侵攻やアルジェリア戦争に反対したイギリスやフランスの新左翼を仲立ちにしていることが判明する。しかし、西欧の新左翼に対する「模倣の欲望」^{ミメティック・デザイア}に基づく、「正真正銘」のモデルの探求が学生たちの目を自国の問題から逸らすのではないかという危機感が、逆説的な形でリュシアンリュシアンの科白に登場するのである。「海の向こうを気にかける身分か」や「植民地がなければフランスはやっていけない、日本だって四国をもっているじゃないかとおれはいったんだ」というリュシアンリュシアンの言葉は、日本の戦前・戦中における「帝国責任」の問題を読者に突きつけてくる。

たとえば、岩崎稔は、「ガイドマップ 40・50年代」という座談会で、「帝国責任」、言い換えると、大日本帝国の植民地主義問題といった認識をめぐる記憶が日本の戦後表象において忘却されており、抽象的な「国民化」のイメージが形成されていったことを指摘する。つまり、終戦までに日本の領土であった朝鮮は、アメリカ合衆国の占領や国の分断によって、朝鮮戦争を経て 80年代までに「暴力的な時代」に巻き込まれる展開となり、中国でも中華人民共和国の建国（＝革命）まで内戦は続いていったのであった。そのみならず、日本が植民地支配の宗主国ではなかったにしても戦中占領していた、対英・対蘭反帝国主義的闘争を遂行したインドネシアや、対仏や後の対米の民族解放戦争を行なったインドシナの問題¹⁰⁾は大日本帝国の植民地主義と深く関わっているのである。なおかつ、「アジア各地で」、「コロニアリズムをめぐる非常に緊張した状況が、そして戦争状態が、戦中から戦後に連続してずっとあるわけ」であったのにもかかわらず、「日本の戦後表象というのは、そういう東アジア全体のなかの配置関係というのをすっかり欠落させて、硬く国民化した形で一九四五年八月十五日の経験をつくっていったのである¹¹⁾。

リュシアンリュシアンの発言に表象されている見解は、自己の「帝国責任」を抜きにした政治的な参加の「正真正銘」性があいまいになってしまうということであらわにしている。ここで注目すべき点は、この口調と、夏男の帝国主義やその文化に従属することを「性差別」的な言説をとおして批判した女子学生の口調との類似性にある。正当で、論理的な観念に基づく批判が、その正当性を根底から揺るがすような差別的な文体をとおして行なわれることは、異化作用の一種であることに相違ない。

物語の終局の部分において夏男は、「正真正銘性」を、彼の同胞である康子に見出すといった自己欺瞞に陥ってしまう。夏男は「男らしさ」を回復することを「援助」した康子と結婚することを決断し、そのことをリュシアンリュシアンに知らせる。二人の異性愛としての性愛関係には反対しない姿勢を示したリュシアンリュシアンだが、結婚の話を知ると動揺する。しかし、リュシアンリュシアンは、康子の「偽善」を夏男に「力づくでも」知らせることにする。リュシアンリュシアンは彼の「狂気じみた高揚を無視するために、かれに背を向けて歩き出そうとした」夏男の片腕を「力強い掌」で掴んで引き戻した。

リュシアンは彼を銀座にある、同性愛の外国人むけのクラブに連れて行く。そのクラブの中年のマスターとリュシアンによって、康子が男同士の「愛人たちと三人ひとぐみでくらす種類」の女で「男たちの愛を傍からたすけたり、疲れた片方のかわりにたのしませたり」(23) すること、そしてホストの若い男に「不能と寝たってちゃんときまりをつける」(24) 種類の娼婦であることを知らされた夏男は、その時点まで抱えてきた自己欺瞞に覚醒する。彼女が「不能」か「男らしくない」「男」としか寝ないとマスターが付け加える——『あの女は乱暴な男、男らしい男とは寝ないんです、怖がってしましてね』とマスターがいていた。『若いころに痛めつけられたらしいから』(23)。衝撃を受け、そこを飛び出して去った夏男の若い娼婦との「男らしさ」の「試し」が挫折すると、ゲイクラブのマスター、ホストやリュシアンによる主張が立証され、屈辱感に満ちた青年をやさしく迎えるリュシアンのもとへ戻る。夏男と康子の「合同」は、つぎのような悲喜劇的なフィナーレで挫折に終わる展開となる。

「昨日から今日、どたばた騒ぎだったなあ、comédie だった」とリュシアンは言った。「しかもちょっとした地獄編の comédie だ」

ああ、おれは地獄の苦しみだ、と夏男は考え涙をわきあがらせた。おれのおかまやろう。地獄の苦しみだ。

「休暇がとれしだい、フランスへ行ってこよう、おまえはおれの両親の気にいるだろう」とリュシアンが満足と快樂の前ぶれにみたされた、いくぶんせつかな声でいった。そしてこんな comédie は忘れてしまおう、さかんな喝采、それでおわりだ」

夏男を裸にしてからリュシアンは山羊の頭と紫いろの花々を刺繍したピジャマを着せようとしていた。おれのおかまやろう、おれにこそ拍手喝采だ、とかかれは細心の注意をはらって胸のホックをあわせてくれているリュシアンの作業を容易にするためにあごをあおむけて頬の両脇へ涙をこぼしながら考えた。(26)

5. Engager という単語の「誤訳」が意味するもの

この短編での「engager」という言葉の使い方は両義的であり、それゆえその「正真正銘」の意味が相対化されている。夏男がリュシアンに康子への愛を告白した場面で、このことへ反発したリュシアンは夏男に「engager している」旨を言う。「engager」の非政治的な文脈で、つまり「性的」な意味合いでの使用は夏男を憤らせ、彼の屈辱感を一層高める。しかし、そこには夏男のフランス語力の乏しさによる誤訳の問題が潜んでいる。

ああ、engager している、と夏男は怒りにかられて考えた。恋人たちが婚約するときにつかうような意味でこいつはこの言葉をつかっているのだろう。そしておれと

きたら、リュシアンと一緒にくらすために、政治にたいしてはもとより、ほんとうの現実にさえ手も足も出ない、なにひとつ engager しない男だった。(21)

引用した箇所で、「engager」という外国語の単語はカタカナに変換されずローマ字で表記されることによって「政治的な参加」^{アンガージュマン}のモチーフに焦点が絞られていると言えよう。その一方で夏男は、「engager」を「恋人たちが婚約するときにつかう」言葉だと説明するが、それは疑問の余地のない誤訳なのである。なぜなら「engager」というフランス語の動詞には「恋人たちが婚約する」という意味は存在しないからだ。他動詞としての「engager」という動詞には、日本のような「半植民地」的な立場に置かれた国の「新植民地主義」体制における位置と役割を思い起こすような意味があるのである。

- ・「雇用する、雇い入れる」、
- ・「<人>に……（すること）を強く促す」、
- ・「……を狭い場所に入りこませる」、
- ・「戦闘を開始する」、
- ・「を（企て・状況などに）巻き込む」、
- ・「を質に入れる、抵当に入れる」、
- ・「<資金・兵力など>をつぎ込む、投入する」¹²⁾など。

他方、夏男は、「engager」の政治的な意味合いに触れる際「おれときたら、リュシアンと一緒にくらすために、政治にたいしてはもとより、ほんとうの現実にさえ手も足も出ない、なにひとつ engager しない男だった」と言う。しかし、この場合も、語り手としての夏男の翻訳が誤っている。なぜなら、フランス語で、「(知識人や作家が) (社会・政治的に)コミットする、社会[政治]問題に積極的に関与する」¹³⁾、つまり「政治的な参加」をするということを示す単語は「engager」という他動詞ではなく、その代名動詞形 (verbe pronominal) つまり「s'engager」なのであるからだ。そこで、「engager」というフランス語のこの言葉には「婚約」という「恋人たちが婚約するときにつかうような」「性的」な意味が存在しないことや、「政治的な参加」^{アンガージュマン}という「政治」に関わる意味合いも同語の代名動詞形のみにあることからすると、この単語の翻訳における誤りが確認できる。

この言葉が「婚約」という意味を帯びるようになったのは、外来語として15世紀に取り込まれた英語のみにおいてである。すなわち、英語では「to engage」が「(人が) (...) 婚約している」そして「to be engaged」は「婚約する」という意味を指す、古フランス語から伝来した外来語として使用されている。そこで、夏男は、フランス語の「engager」の意味を変形させて英語に導入された「to engage・to be engaged」とそれが派生した原語の意味を混同しているのである。

そこには、英語化され、フランス語における「本物の」意味を喪失したこの単語の両義性において、「同時代を支配するイデオロギー」としての文化帝国主義の影が落とされていることに注目すべきである。つまり、フランス文学科の学生であると思われる夏男は、戦後の文化帝国主義の主力としてのアメリカ合衆国の「国語」としての英語の強力な影響下に置かれており、「本物の」フランス語やフランス文化と「接触」しようとする際にさえ「新植民地主義」の言語や文化が介入し、彼の意識や観点に方向付けを与えているのである。

他方、物語言説のレヴェルでは、夏男の誤訳・誤解という設定からリュシアンが、「見るまえに跳べ」の外国誌の特派員のガブリエルのように、「フランス的なるもの」＝「旧植民地主義的なるもの」と同時に、冷戦体制下における「新植民地主義」という支配形態をも体現しているという仕掛けが顕在化する。このことは先の引用文において、政治的に行動的な学生たちが「第三世界」問題を抗議するためにフランスやイギリスのような旧植民地主義の宗主国のみならず、アメリカという「新植民地」を主導する国の大使館にも声明文を持ち込むという設定においても明らかである。そして、このことは、物語運動における「engager」という単語の「意識的誤用」という仕掛けによって可能となる。

6. 「政治的離脱」の推進のイデオロギー装置としての文化帝国主義

植民地化された諸地域において第二次世界大戦後には、「脱植民地化」という大規模な同時代的な現象が発現し、それが「第三世界」という新しいカテゴリーの誕生をもたらした。しかし「脱植民地化」は、世界がヤルタ会談において米ソによって東西に分断され、世界の支配権が再分配されたことの結果成立した「冷戦構造」という新しい世界秩序下において屈折した形で展開することになった。つまり、旧植民地はアメリカ合衆国が主導する「新植民地主義」支配下に組み込まれ、軍事的・政治的・経済的に搾取されることになり、これらの諸国には「偽物の」独立しか許されなかった。その反面、ナチドイツに対して西欧の普遍的な価値としての「自由」と「民主主義」を守るために闘ったとして神話化されたソ連も、そのような「正真正銘」の性質を、とりわけスターリン批判・ハンガリー動乱といった一連の大事件の結末として、なし崩し的に喪失しつつあった。そのみならず、「脱植民地化」した諸国を、完全にあるいは、部分的に自らの体制に組み込むことによって、それらを「ゲリラ国家」に変身させ、このことがそれらの国々において内戦・民族問題などを引き起こしたことからすると、社会主義圏に入った脱植民地化した諸国にも「擬似」の「自立性」しか付与されなかったことは明白だ。

そこで「脱植民地化」＝「decolonization」とは、実際のところ決して元・植民地地域の二つの大国による解放なのではなく、それらの「再植民地化」＝「recolonization」として遂行されたものなのであった。ここには、「脱植民地化」という言葉における、「植民地

を解放する」という意味と「脱植民地化」の実践的なレヴェル（再植民地化）の間の「ズレ」からくる「偽物さ」を見逃してはならない。これらの元植民地の諸国は、脱植民地化という「偽物の」名の下に「再植民地化」に「強く促」された＝「engager」されたわけである。

アメリカ合衆国とソ連に「強く促」されても＝「engager」されても、これらの二つの西欧大国のどちらの体制にも「入りこませられ」たくない（＝「engager」されたくない）、そのような帝国支配的な体制に「巻き込」まれたくない（＝「engager」されたくない）、「雇用」（＝「engager」）されたくない「第三世界」は、このような二項対立の「圏外」において「正真正銘」の独立を探求する（＝s'engager）ようになった。「非同盟主義」をとなえたバンドン会議は、そのもつとも顕著なあらわれである。なお、既存社会主義の「擬制性」に不満を抱いていた西ヨーロッパの「新左翼」や日本におけるその対応物として見なされた全学連は、「新植民地主義」（合衆国）や「一国社会主義」（ソ連）といった双方の西洋大国の中心指向的で一方的な支配形態に組み込まれることを拒んで、非同盟主義を唱えた「第三世界」に「正真正銘性」のモデルを求めようになった。

この短編において「正真正銘」の自己同一性の確立は、「男らしさ」というモチーフによって支えられたことに言及したが、「新植民地主義」を体現するかたき役としてのリュシアンが康子という主婦兼娼婦を雇い入れる（＝engager）ということは、異性愛者になる欲望と希望を持つ夏男の、そのような希望の「芽を」決定的に「ひねりつぶすため」の罠であったことが想像に難くない。

「喝采」において読者は、同時代を支配するイデオロギーとしての「新植民地主義」的な文化帝国主義の中心指向的で一方的な権力行使の働き方を読むことになる。例えば、夏男の康子との一時的・擬似的な「コミットメント」は、リュシアンが仕掛けたものであり、リュシアンはこれを仲立ちにして夏男に不能であることを受け入れさせ、あらゆるアンガジュマンの企図の放棄を「強く促す」ことを目論んでいる。

こうして、夏男は、「本物の」フランス文化と接することを望み、それによって「正真正銘」の自己同一性を達成しようとするが、「新植民地主義」の支配形態に以前よりも徹底的に組み込まれてしまう展開となる。そこには、「新植民地主義」的な支配を「容易にする」という文化帝国主義の働きかけが介入している。「新植民地主義」の「宣伝」と、「正真正銘性」を備えていることを訴えるソ連の「宣伝」との差は、前者が「正真正銘」の「モデル」を探求しつつける「第三世界」の青年に、文化帝国主義というイデオロギー装置を動員することによって、そのような「正真正銘」の「モデル」の不在やそのようなモデルへの「政治的な参加」の不可能性を納得させるよう「強く促す」ことにある。

7. サルトルの反植民地理論と「第三世界」文学としての「喝采」

結局、夏男も、「日本人の学生ども」も「正真正銘性」を発見することができない。こ

ここで、「正真正銘性」＝「authenticité」も、「政治的な参加」＝「engagement」もサルトルが展開した概念であることに言及しなければならない。とりわけ、「authenticité」が実存主義的な概念であることは周知のとおりだが、大江の最初期小説に濃厚な存在感を帯びているのは、戦前・中の実存主義的な哲学者としてのサルトルの「authenticité」という概念ではなく、サルトルが戦後に展開させた政治哲学の概念としてのそれなのである。フランス語における「engagement・s'engager」という単語に「政治的な参加」といった特異な意味を与えたのはサルトルの政治哲学である。

1950～60年代の日本においても世界各国でと同様に、サルトルは、広く読まれ、高く評価された哲学者・作家であった。大江自身も、サルトルを愛読したのみならず、サルトルの想像力論を分析する「サルトルの想像力について」と題した卒業論文を執筆した。¹⁴⁾ サルトルが戦後に展開した、実存主義とマルクス主義を総合した政治的実存主義によると「正真正銘性」は、人間存在に関わる主要な美德である。例えば、サルトルは「正真正銘性」をめぐる次のように述べている。

もし今、われわれの考えるように、人間とは、状況における自由体であることが認められれば、その自由が正統 [=正真正銘] である (authentique) か否かは、それが、自分の生まれ出た状況の中において、如何に自己を選択するかによって決まることになる。正統性 [=正真正銘性] は、言うまでもなく、状況を、明晰且つ正当に自覚し、その状況に内在する責任と危険を引き受け、誇りをもって、あるいは、辱恥にもかかえても、そして時には、恐怖や憎悪によっても、その状況の権利を主張するところにある。従って正統性 [=正真正銘性] が、非常な勇気を要し、更に、勇気以上のものも必要とすることは、疑う余地がない。¹⁵⁾

つまり、「正真正銘性」とは、人間が、自らが置かれている状況を「自覚し」、「その状況の内在する責任と危険を引き受け」ることによって行われる真の意味の「自由」を探求する行為である。そして、「政治的な参加」は、政治的なレベルの「正真正銘性」の探求であると言える。そのうえ、サルトルは、小説など散文としての「創作活動」がつねに「政治的な参加」をしたものではなくてはならないという論点を提起し、当時の大半の批評家の酷評に曝されたのであった。『文学とは何か』は、そのような酷評を跳ね返す上で書かれた、「政治的に参加」した「文学」のマニフェストである。本書において、「言葉」を「装てんされたピストール」に譬えるサルトルは次のように述べる。

「束縛された」 [=政治的な参加をした] 作家 [=l'écrivain «engagé»] は話が行為であることを知っている。彼は、暴露することは変えることであり、変えるという企てにおいてしか暴露することはできないということを知っている。社会と人間との不

偏不党の画面をつくらうという不可能な夢は放棄された。¹⁶⁾

ここで注目すべきは、とりわけ 1948 年以降、サルトルにおける「政治的な参加」は、「第三世界」へのコミットメントという形を取るようになったことである。「政治的な参加をした」作家=「écrivain «engagé」としてのサルトルはエッセイや行動によってフランスにおける「アルジェリア戦争反対運動」を主導した知識人であり、その他の「第三世界」民族解放運動を支持しつづけた。このことは、サルトルが「第三世界」の解放運動において「正真正銘性」の探求に照応するようなものを見いだしたことに由来するのである。そのうえ、そうした解放運動を方向付けたファノン、センゴール、ゲバラ、カストロ、ルムンバのような「第三世界」の指導者の参照先はサルトルそのものであった。アフリカを始めとする、「第三世界」の解放運動への「政治的な参加」やポストコロニアル研究の形成への貢献の結果、サルトルは、後に「アフリカ人の哲学者」¹⁷⁾と呼ばれるようになった。とりわけ、サルトルの「正真正銘性」の探求としての「第三世界」の民族解放運動をめぐる考察の結実であった *Colonialisme et néo-colonialisme* (1964) や *Critique de la raison dialectique* (1960) は、後のポストコロニアル研究の形成において重要な役割を果たした。

無論、大江の最初期小説における「性と政治」のテーマも、「第三世界」をめぐるこうした問題意識とは密接不可分の関係にあった。「喝采」において、「正真正銘性」や「政治的な参加」といった問題は「第三世界」の問題との連動性において捉えられている。なお、「見るまえに跳べ」、「部屋」や『われらの時代』のような、「喝采」以外の最初期小説においても、「アフリカ」を始めとする「第三世界」は、主人公ないしは他の作中人物の熱情的な憧憬の対象の形を取っている。「喝采」の独自性は、サルトルの政治哲学における「正真正銘性」という概念が、60 年代の言説空間を支配することになった「第三世界」論や反植民地理論において重要な役割を果たすに至ることを見抜いたところにある。

反植民地理論もポストコロニアル研究も、「第三世界」の地域の文化を、西欧の文化に同化させることによって、それらの「正真正銘性」を破壊しようとしつづけた文化帝国主義への抵抗なのである。「喝采」は夏男という一人の学生の物語をとおして、「帝国主義」と「文化」の相互作用を極めてヴィヴィッドに捉え、表現している。そのような中心指向的な「文化」と関わる際、その文化が必然的に包含している権力装置に対して、「批判的な距離」に基づく周辺的な立場を保つことの重要性を強調する。つねに、周辺の立場からあらゆる中心指向的な権力に逆らって書いてきた大江の文学作品に独自性を与えた要因の一つは、作家におけるこのような「政治的な参加」に依拠するモラル意識なのであったと言っても過言ではない。たとえば、『文化と帝国主義』の著者であるエドワード・サイードが、ハンティントンの「文明の衝突論」を批判する講演で、大江を南

米のマルケスや北アフリカのマフフーズと並ぶような、「国語および民族性によって押し付けられる国民的且つ文化的な制限」を越境した（第三）「世界文学」の作家として位置づけたこともそのためであろう¹⁸⁾。

註

- 1) サイド著『知識人とは何か』を参照。
- 2) 大江健三郎の『沖縄ノート』を中心とする一部の書物において、沖縄戦での集団自決が日本軍の指揮官によって強いられたことを記述する内容に対し、元指揮官や遺族が名誉毀損を訴えた裁判である。2008年10月31日の大阪高裁の判決により、大江健三郎や岩波書店の勝訴で終わった。
- 3) 周知のとおり「九条の会」は自衛隊のイラクやアフガン派兵に強く反対する姿勢を示した。
- 4) なお、『水死』（2009年）においても「政治的な参加」の問題に言及されている。『水死』の主人公である作家長江古義人が敗戦の夏に洪水の川に船出し水死した父をめぐる小説を書こうと苦闘する過程で、その小説を題材とした演劇を計画する「穴居人（ザ・ケイヴ・マン）」という劇団と関わるようになる。「水死小説」の創作企画が挫折したことを契機に、看板女優の穴井ウナイコは、劇団から独立し長江の妹であるアサの支持をも受け、フェミニストの色合いが濃厚で前衛的な「政治的に参加」した演劇活動＝「死んだ犬を投げる芝居」の企画に着手する。このことを手紙で兄の長江に報告する際にアサが次のように書いている。「さてウナイコが新しい体制で演劇活動を始めようとしていることには、そうするほかない事情がからんでいます。今度の大成功をきっかけに、「死んだ犬を投げる」芝居への、この地方の右派からの批判は強まっています。それが現実的な妨害に発展すれば闘うほかありませんが、それをウナイコは、生き方のスタイルとして政治的なアンガージュマンはしたくないマサオ [= 劇団のリーダー] の、「穴居人」から独立した劇団としてやる、と明確にしておきたいのです。」（『水死』、講談社、202頁）このことは、大江文学全体にわたって本格的な役割を担ってきた「政治的な参加」の問題が作家の「後期の仕事」^{レイト・ワーク}においても重要な位置を占めていることを示す一例である。
- 5) 「喝采」に言及する唯一の文献は、この短編が簡潔に紹介される篠原茂著『大江健三郎文学事典』（森田出版、1998年、48～50頁）である。
- 6) 以下、「喝采」の引用はすべて「文芸春秋編集」『文学界』、1958年9月号によった。
- 7) たとえば1955年の砂川闘争からこの小説が掲載された1958年の秋にかけての期間における、一般学生の政治的離脱という社会的な停滞状態の全景を概観する上で、当時の学生作家としての大江自身が、この短編の発表からおよそ2ヵ月後、1958年11月に執筆した「叫ぶ全学連とふるえる学生——全国三十万の学生に背を向けられないために——」（『文芸春秋』、1958年11月号）というエッセーが多くの手がかりを与えるものとなっている。このエッセーで、全学連の性急な高揚感に基づく行動方針やそれが「上意下達」的に一般学生に強引に押し付けら

れるというやり方、一言でまとめると、権威主義的な「アジテーション」は批判的にされている。無論それは、内部からのものであり、一般の学生と全学連執行委員会とのあいだにおけるダイナミックなつながりの希薄さに注目を集めようとする内容のものである。

- 8) 「見るまえに跳べ」の物語内の時間は1957年として設定され、「二年まえ」という表現が1955年の砂川闘争を想起させるものとなっている。「二年まえ、ぼくは基地拡張を反対する闘争に加わって雨に濡れた髪から滴る雨水が眼や唇をつたい、あごを流れえりくびに流れこんで下着を濡らすのを疲れきり寒さに身ぶるいしながら耐えていたものだった。」（「見るまえに跳べ」、136頁）
- 9) 大嶽秀夫著『新左翼の遺産』、17頁。
- 10) このモチーフが「見るまえに跳べ」において登場することは、前章で述べたとおりである。
- 11) 『戦後日本スタディーズ 1 40・50年代』 岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一、編著紀伊國屋書店、2009、14～15頁。
- 12) 『プチ・ロワイヤル仏和辞典』、第三版、旺文社、2003年。
- 13) 同上書。
- 14) 大江健三郎著、尾崎真理子聞き手・構成『大江健三郎作家自身を語る』、東京、新潮社、2007年、34頁。
- 15) ジャン・ポール・サルトル『ユダヤ人』、(*Réflexions sur la question juive*, 1954)、東京、岩波書店、1956、111～112頁。
- 16) Jean-Paul Sartre, *Qu'est-ce que la littérature?* Gallimard, Paris, 1948, 30頁／サルトル著、加藤周一、白井健三郎訳『文学とは何か』、シチュアション 2、改訂版、京都、人文書院、1952年、22頁。
- 17) V.Y. Mudimbe, *The Invention of Africa: Gnosis, Philosophy, and the Order of Knowledge*, Bloomington, Indiana University Press, 1988, 83頁。
- 18) Edward Said, *The Myth of "Clash of Civilizations,"* DVD Directed by. Sut Jully Northampton MA: Media Education Foundation, 1998.